© Yuriko Takagi

「ショスタコーヴィチは僕自身だ！」と叫ぶ マエストロ井上道義、ふたたび

今月のマエストロ

井上道義
Michiyoshi Inoue

文◎池田卓夫 | Takuo Ikeda

3年ぶりの定期公演登場 色彩感と生命力にあふれた音楽づくり

井上道義がNHK交響楽団定期公演の指揮台に2016年11月以来、約3年振りに戻ってくる。N響定期へのデビューは1978年。その後、特別公演や国内ツアーなどを通じて信頼関係を培(つちか)っていたが、久方ぶりとなった前回の定期公演登場時には、「38年間の空白を経ての復帰」と騒がれた。

1970年代半ば、デビュー直後の井上は恩師セルジュ・チェリビダッケ譲りの厳格なリハーサル（音階練習まで求めた！）、歯に衣を着せない言動などで全国数多くのオーケストラと衝突し続けた。ダンサーとしての教育も受け、長身長髪の全身を大きく動かす指揮ぶりは40年前の日本楽壇で異彩を放ち、「とんでもない指揮者が現れた」と評判に。色彩感と生命力にあふれた音楽づくりが、実は、音楽の本質を鋭く見据えた読譜の結果であることを正しく理解されるまで、かなりの時間を要した。

相対する2曲を並べたプログラムから見える マエストロの境涯

長髪がスキンヘッドに変わり、自身のルーツの半分がアメリカ合衆国にあることを深く意識した前後から、井上の音楽づくりには「ドラマ」の要素が強まった。藤原歌劇団主催、東敦子が最後に主役を演じた《蝶々夫人》の指揮

でオペラにデビューしたのは1984年と少し遅めだが、作劇術（ドラマトゥルギー）への傾倒はやがて、自ら演出まで手がける展開をみせた。ロシア音楽の正統な後継者でありながら、旧ソ連のスターリン独裁政権の荒波をかいくぐり、一筋縄ではいかない人生と創作を余儀なくされた作曲家の生涯に「人間の劇場」の深淵をみたのか、21世紀に入っての井上はショスタコーヴィチの交響曲にとことん、のめり込んでいく。

2007年11月から12月には東京の日比谷公会堂に日本とロシアの複数のオーケストラを招き、「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト2007」を主催、指揮した。そのうち《第9番》と《第15番》の出来には自ら納得できず、2016年2月に再演、全曲を収めたCDボックスを完成させた。アートワークも井上が手がけ、「苦虫を噛み潰した」よりも「おちゃめ」な作曲家の写真を意図的に多く載せた。2014年の4月から11月の井上は咽頭（いんとう）がんの治療に専念し、一命をとりとめた。最初は「生き残れるだろうか?」と、元問題児も弱気だったが、復帰後は、独自の死生観を深めた。諧謔（かいぎゃく）と絶望、楽観が万華鏡のように織り込まれ、一筋縄ではいかないショスタコーヴィチのスコアから、以前にも増して濃い音楽を引き出すようになった。

2006年に還暦（60歳）を迎えたときは、「生まれ変わったんだから、もう一度暴れてやる!」と赤いセーターを着て叫んでいた。古希（70歳）に際し「今も、そう思っているんですか? 」と尋ねたら、「違う。生まれ変わるのは自分ではなくて、周囲の光景や人々だった。新しい世代や音楽との出会いを素直に喜ぶ方が、自分の人生も豊かにできるんだよ」と答えた。今回の定期公演でもN響の若い現役楽員たちと正面から向き合い、「NHKホールの音響に最適の作品」という米国の作曲家、グラスの協奏曲を取り上げるが、ソリストに楽員2人を起用することにも、今の井上の境涯を垣間見ることができる。

［いけだ たくお／音楽ジャーナリスト］

プロフィール

井上道義は1978年に5月定期公演でN響デビュー、共演歴は40年を超えた。とりわけ2016年11月の定期公演で指揮したオール・ショスタコーヴィチ・プログラムは多くの聴衆、評論家が同年のベスト演奏会に挙げた。

井上は1990年から1998年に京都市交響楽団の音楽監督兼常任指揮者だった時期、「日本中の民間オーケストラができないプログラムに挑戦する」との目的でショスタコーヴィチのシリーズに挑んだ。やがて「ショスタコーヴィチは僕自身だ! 」と公言するほどまで傾倒、2007年11月から12月にかけてショスタコーヴィチ作品の多くが日本初演された「聖地」、日比谷公会堂で交響曲の全曲演奏会を行ない、2016年に全集CDを私財で完成させた。今回はショスタコーヴィチの《交響曲第11番「1905年」》に「米ソ冷戦時代」の相手方、アメリカ合衆国の現役作曲家グラスの作品を組み合わせ、意表を突く。［池田卓夫］

yoshi Inoue

井上道義が指揮する
プログラム詳細はこちら
PROGRAM A ▶ P. 9

© Mail Hannok

5シーズン連続の定期公演登場 マエストロとN響、両者のなす特別な化学反応

推進力も自由自在 色彩感豊かで華麗な音楽

トゥガン・ソヒエフはN響と最も相性の良い指揮者のひとりといえるだろう。2015/16年以降は毎シーズン出演しており、今期で5期連続となる。「本番ではリハーサル以上の化学反応が起こります。N響は私のアイデアを消化して、一瞬にしてそれ以上のものを投げ返してくれる。これは特別なことなのです」——今や世界中で引っ張りだこの人気指揮者にこう言わしめる信頼関係は、東京の聴衆の財産だろう。2008年の初共演当時、ソヒエフはまだ30代に入ったばかりの若手だった。

指導者として名高いイリヤ・ムーシン、さらにユーリ・テミルカーノフに学んだ、いわばロシア音楽の懐から現れた才能だ。トゥールーズ・キャピトル劇場管弦楽団の音楽監督として、フランス音楽も幅広くレパートリーに組み込んでいる。現在はボリショイ劇場の音楽監督も兼務するが、音で情景を喚起する力はシンフォニックな作品でも十二分に発揮されている。

ソヒエフの魅力は何をおいても音楽を色彩感豊かに、華麗に響かせる技にある。スタイルはあくまで正攻法。力業で鳴らすのでなく、ツボを摑(つか)んで引っ張っていくことで作品や楽団の持ち味を無理なく立たせていく。だからオーケストラも俄然(がぜん)積極的になる。心地よいボリューム感に包まれ歌われる旋律はエレガントに上気し、サウンドは美しく香る。テンポやリズムに

今月のマエストロ

トゥガン・ソヒエフ
Tugan Sokhiev

文◎江藤光紀 | Mitsunori Eto

対するセンスも抜群で、大地に根を張るような安定感から体がふわっと浮かび上がるような軽やかさまで、推進力も自由自在だ。

フランス音楽とロシア音楽で固めた マエストロらしさが表れたプログラム

さて、今月の定期公演ではBプロをフランス物、Cプロをロシア物で固めた。選曲にもソヒエフらしさが表れている。

近代フランスの管弦楽曲をたどるBプロを、ベルリオーズ《ファウストのごう罰》からの〈鬼火のメヌエット〉〈ハンガリー行進曲〉で始めるのは、描写的な小品で聴き手を自らの世界にぐっと引き寄せるソヒエフお得意の手法。ビゼーの《交響曲第1番》では、そのテンポ感や歌い回しの妙がダイレクトに味わえるだろう。現代への扉を開いた《牧神の午後への前奏曲》を経て、最後は再びベルリオーズのドラマチックな交響曲《ロメオとジュリエット》(抜粋)で結ぶ。前回披露した《イタリアのハロルド》の、息の長い音楽を見通しよくまとめる手腕はここでも発揮されるはずだ。

Cプログラムはエキゾチックで華やかな《イスラメイ》を冒頭に置き、濃厚で骨太な2曲を組み合わせた。ラフマニノフの《パガニーニの主題による狂詩曲》ではニコラ・アンゲリッシュの精緻(せいち)なピアニズムをどう演出するか。運命の悲劇が、哀切に満ちたメロディ、はじけるようなピチカートを経て、輝かしいフィナーレとなだれ込むチャイコフスキーの《交響曲第4番》では、交響楽の醍醐(だいご)味を満喫したい。

［えとう みつのり／音楽評論家］

プロフィール

1977年北オセチアに生まれ、サンクトペテルブルク音楽院でイリヤ・ムーシン、続いてユーリ・テミルカーノフに師事した。

2002年のウェールズ・ナショナル・オペラをはじめとして、メトロポリタン歌劇場、エクサン・プロヴァンス音楽祭と次々に国際的なデビューを果たした。2005年にはトゥールーズ・キャピトル劇場管弦楽団の首席客演指揮者、さらに2008年には音楽監督に就任。加えて2014年からはボリショイ劇場の音楽監督兼首席指揮者の任にあり、2012年から2016年にかけてはベルリン・ドイツ交響楽団の音楽監督も務めた。近年はベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団をはじめ、世界各地の名門オーケストラに定期的に客演しており、21世紀になって頭角を現した世代でもっとも注目を集める指揮者である。

NHK交響楽団とは2008年に初共演して以来、たびたび客演を重ねている。2016年以降は毎シーズン指揮台に立ち、ロシア、フランスもののレパートリーを中心に、色彩感豊かなサウンドを導き絶賛を博している。［江藤光紀］

gan Sokhiev

トゥガン・ソヒエフが指揮する プログラム詳細はこちら
PROGRAM B ▶ P. 13
PROGRAM C ▶ P. 17

PROGRAM

A

第1921回

NHKホール

10/5 土 6:00pm

10/6 日 3:00pm

指揮 | 井上道義 | 指揮者プロフィールはp.6

ティンパニ | 植松 透、久保昌一

コンサートマスター | ライナー・キュッヒル

グラス
2人のティンパニストと管弦楽のための協奏的幻想曲(2000)[27′]
Ⅰ ♩=144
Ⅱ ♩=96〜104
Ⅲ ♩=176

——休憩(20分)——

ショスタコーヴィチ
交響曲 第11番 ト短調 作品103「1905年」[60′]
Ⅰ 王宮前広場
Ⅱ 1月9日
Ⅲ 永遠の追憶
Ⅳ 警鐘

Artist Profiles

植松 透(ティンパニ)

東京都出身。国立音楽大学、同大学院修了。打楽器を岡田知之、藤井むつ子、ペーター・ゾンダーマンに師事。1993年NHK交響楽団に入団、現在は首席ティンパニ奏者。1998年N響海外派遣研修員としてベルリンに留学、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団首席ティンパニ奏者ライナー・ゼーガースに師事した。ゲーテ生誕250年記念演奏会でのベルリン・ファゴット・カルテットと山本純ノ介《Mehr Licht》の世界初演、ギリシャ・パトラス国際芸術祭への参加など海外での活動も多い。N響では武満徹《フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム》をはじめソリストとしての出演も重ねている。国立音楽大学、洗足学園音楽大学、札幌大谷大学で後進の指導を行うほか、幼児と音楽の関わりを打楽器の視点から捉える研究も長年続けており、幼稚園や特別支援学校、また被災地なども度々訪れ全国の子どもたちと音楽の交流を深めている。

久保昌一（ティンパニ）

鹿児島県出身。東京音楽大学卒業。在学時に野口力、菅原淳、岡田眞理子の各氏に師事。1987年よりベルリン芸術大学に留学し、オスヴァルト・フォーグラー教授に師事した。ベルリン滞在時は、ベルリン・ドイツ・オペラなどで活躍。1990年代初頭、N響の招聘により来日中のドレスデン国立管弦楽団首席ティンパニ奏者ペーター・ゾンダーマンに指導を受ける。1993年にNHK交響楽団に入団し、現在は首席ティンパニ奏者。2001年第3回別府アルゲリッチ音楽祭にてマルタ・アルゲリッチ、ネルソン・フレイレ両氏と共演、2010年シュトゥットガルト放送交響楽団の客員ティンパニストとしてシュヴェツィンゲン音楽祭等に出演した。2017年には、オランダ・マーストリヒト音楽院にてマスタークラスを行う。現在、東京音楽大学兼任教授、武蔵野音楽大学講師として後進の指導にも取り組んでいる。

Program Notes｜千葉 潤

アメリカ・ミニマル音楽の大御所フィリップ・グラス（1937～）と、激動のソ連史を音楽に刻んだドミートリ・ショスタコーヴィチ（1906～1975）。対照的な2人を結びつける本日のプログラムの要は「リズム」である。インド音楽の影響を受けたグラス作品での祝祭的なティンパニの乱舞と、ロシア革命時代の緊迫した鼓動を伝えるショスタコーヴィチの交響曲。東洋的な世界観と現代史の重みをさばき分けるリズム（そして打楽器）の表現力に注目したい。

グラス

2人のティンパニストと管弦楽のための協奏的幻想曲（2000）

フィリップ・グラスは、1960年代後半のアメリカで生み出されたミニマル音楽を代表する作曲家である。限定された和音やリズムの動機を延々と反復しながら、徐々に動機どうしが多層的に重なり合い、ずらされながら、全体的音響が変化していくのがミニマリズムの特徴だが、グラスの場合には、シタール奏者ラヴィ・シャンカルとの出会いがきっかけで、インドの音楽理論や時間感覚からの影響を強く受けており、日常的な時間感覚を超越したかのように、極彩色の万華鏡のような音響が息長く持続する。

そのグラスも82歳となり、かつての異端児もいまや大御所的存在である（2012年には高松宮殿下記念世界文化賞を受賞）。数々の映画音楽やロック歌手デヴィッド・ボウイとのコラボレーションなど、ジャンルをまたいだ創作活動はいかにもアメリカ的であり、ミニマル音楽のもつ良い意味での大衆性を最大限に展開した点に、グラスの功績があるといえよう。

《協奏的幻想曲》は、アメリカのヴィルトゥオーゾ・ティンパニ奏者ジョナサン・ハースの

ために2000年に作曲された。クラシックのみならずジャズやロック、そして現代音楽まで幅広いジャンルで活躍するハースは「ティンパニのパガニーニ」と称えられ、その超絶テクニックはこの曲の独奏パートに遺憾(いかん)なく発揮されている。

第1楽章は拍を3＋3＋4に分割した10/8拍子と、落ち着いた3/4拍子が交差しながら進み、リズム優位の音楽から次第に音階状の旋律が発生していく。

第2楽章は暗い緊張感に貫かれた緩徐楽章であり、ティンパニのリズムに支えられた息の長い旋律を背景に、小さなリズム動機が、アルペッジョから上下に動く音階へと成長しながら、じっくりと大きなクレシェンドを形成する。音楽が落ち着いた後、2人のティンパニストと打楽器群によるカデンツァがつづき、そのまま次の楽章へとつづく。

第3楽章は、第1楽章に似て4/4拍子と7/8拍子が交差しながら進むが、全体的な音響はアジア的な祝祭感に満たされている。

作曲年代	2000年
初演	2000年11月19日、ジョナサン・ハース、スヴェトスラフ・ストヤノヴィの独奏、レオン・ボツタイン指揮、アメリカ交響楽団、ニューヨーク
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、Esクラリネット1、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、シロフォン、グロッケンシュピール、小太鼓、中太鼓、大太鼓、トライアングル、テューブラー・ベル、ウッド・ブロック、タンブリン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タムタム、マリンバ、ヴィブラフォーン、ハープ1、ピアノ1、弦楽、ティンパニ・ソロ2

ショスタコーヴィチ

交響曲 第11番 ト短調 作品103「1905年」

「1905年」という標題のとおり、この曲はロシア革命の発端となった1905年1月9日の「血の日曜日事件」、すなわち、皇帝の居城であるサンクトペテルブルクの冬宮殿に向かって請願行進をしていた民衆が、皇帝軍によって一斉に銃殺された事件を描く標題交響曲である。その主題には当時の革命歌が多数引用され、各楽章の「場面」は、映画音楽に比されるほど描写的であることから、長らく「時代遅れの社会主義リアリズム」の典型と見なされてきた。

しかしながら、友人の回想によれば、ショスタコーヴィチは「この作品は《森の歌》(体制への妥協作として悪評高い)とは全く違う作品になるだろう」と語っており、単なるプロパガンダとは区別していた。またショスタコーヴィチの近親者たちは、1956年に発生した「ハンガリー動乱」(ハンガリーの自由化運動がソ連の軍事侵攻で弾圧された)に対する体制批判的な意図をこの作品の裏に読み取ろうとしたが、それを支持する確証は何もない。それならば一体、ショスタコーヴィチの真意はどこにあったのだろうか。

1956年の第20回共産党大会は、スターリン独裁の罪を暴露したフルシチョフの秘密

報告で有名である。これを機に国内の思想表現の自由化が進むと同時に、スターリン以前の共産主義建設の理念への回帰が叫ばれた時代である。ロシア革命の息吹を今に伝える革命歌の精神に立ち返り、今一度ソ連史を振り返ろうとしたショスタコーヴィチの真意も、恐らくはこうした状況の変化と密接に関連していた。それがハンガリー動乱と重なったことで予期せぬ政治的な含意を示唆したのは歴史の皮肉だが、無辜（むこ）の民衆に対する弾圧の歴史が続くかぎり、この作品は強いメッセージを放ち続けるだろう。

第1楽章〈王宮前広場〉　アダージョ、ト短調、4/4拍子。交響曲の導入的な楽章。凍（い）てついたサンクトペテルブルクを表す弦楽器の虚（うつ）ろなコラール、不気味なティンパニの動機、それにトランペットのもの哀しげなファンファーレは、いずれも冬宮殿のライトモチーフである。中間部では、囚人歌《聞け》《夜は暗い》が相次いで奏される。

第2楽章〈1月9日〉　アレグロ、ト短調、9/8拍子〜4/4拍子。全体で826小節にも及ぶ巨大な音画であり、前半ではショスタコーヴィチの無伴奏合唱曲《革命詩人による10の詩曲》の第6曲〈1月9日〉に由来する主題で民衆の請願行進が描かれ、後半は冬宮殿のライトモチーフに基づくフガートで壮絶な悲劇が展開される。

第3楽章〈永遠の追憶〉　アダージョ、ト短調、4/4拍子。〈永遠の追憶〉とはロシア正教の死者を弔う聖歌である。主部は革命歌《同志は倒れぬ》による葬送行進曲だが、中間部では革命歌《こんにちは、自由よ》に基づく感動的な高揚を見せ、その頂点で〈1月9日〉の主題が回帰する。

第4楽章〈警鐘〉　アレグロ・ノン・トロッポ〜アレグロ、ロ短調〜ト短調、2/4〜3/4拍子。金管が提示する革命歌《圧制者たちよ、激怒せよ》の発展のあと、弦楽合奏が提示する革命歌《ワルシャワ労働歌》がつづき、これにスヴィリドフのオペレッタ《ともしび》の一部がファンファーレ風に加わる。やがてこれまでの主要主題が合流する怒濤（どとう）のような展開部を経て、全オーケストラが〈1月9日〉の主題を歌い上げる感動的なクライマックスを迎える。哀歌を思わせるイングリッシュ・ホルンの独奏を経て、さらなる闘争を予告する決然とした音楽に戻り、ベルが長調と短調の間を揺れ動きながら、最後まで「警鐘」を鳴らし続ける。

作曲年代	1957年2〜8月
初演	1957年10月30日、ナタン・ラフリン指揮、ソビエト国立交響楽団、モスクワ
楽器編成	フルート3（ピッコロ1）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン1）、クラリネット3（バス・クラリネット1）、ファゴット3（コントラファゴット1）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、シロフォン、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、トライアングル、タムタム、テューブラー・ベル、ハープ2、チェレスタ1、弦楽

PROGRAM

B

第1923回

サントリーホール

10/23 水 7:00pm

10/24 木 7:00pm

指揮 | トゥガン・ソヒエフ | 指揮者プロフィールはp.8

コンサートマスター | 篠崎史紀

ベルリオーズ
劇的物語「ファウストのごう罰」から
「鬼火のメヌエット」
「ハンガリー（ラコッツィ）行進曲」［10′］

ビゼー
交響曲 第1番 ハ長調［27′］
Ⅰ アレグロ・ヴィーヴォ
Ⅱ アダージョ
Ⅲ アレグロ・ヴィヴァーチェ―トリオ
Ⅳ アレグロ・ヴィヴァーチェ

――休憩（20分）――

ドビュッシー
牧神の午後への前奏曲［10′］

ベルリオーズ
劇的交響曲「ロメオとジュリエット」
作品17（抜粋）［35′］
ロメオひとり～悲しみ～遠くから聞こえてくる音楽会と舞踏会、キャピュレット家の宴会
愛の場面
マブ女王のスケルツォ

Program Notes | 井上さつき

今回は、フランス近代音楽を代表する作曲家、エクトル・ベルリオーズ（1803～1869）、ジョルジュ・ビゼー（1838～1875）、そしてクロード・ドビュッシー（1862～1918）の名曲が取り上げられている。3人はいずれもパリ音楽院で学び、新進作曲家の登竜門であるローマ大賞を得てローマに遊学した。帰国後すぐに世間に認められたわけではなかったという点も3人に共通している。

このプログラムの聴きどころはベルリオーズ、ビゼー、ドビュッシー三者三様の個性的な管弦楽法だろう。いずれも重厚なドイツ・ロマン派の管弦楽法とはひと味違った、オーケストラの色彩を堪能（たんのう）させてくれる。

ベルリオーズ

劇的物語「ファウストのごう罰」から「鬼火のメヌエット」「ハンガリー（ラコッツィ）行進曲」

《ファウストのごう罰》は4つの部分からなる、声楽とオーケストラのための作品で、ドイツの文豪ゲーテの代表作『ファウスト』の第1部にもとづいている。悪魔メフィストフェレスとの契約によって青年に戻ったファウスト博士とマルガレーテとの悲劇的な愛の物語である。ベルリオーズはこの作品をハンガリーなどへの演奏旅行の途中で書き進めた。今回演奏される2つの管弦楽曲はいずれも演奏会のレパートリーとして知られている。

〈**鬼火のメヌエット**〉は《ファウストのごう罰》第3部でメフィストフェレスが火の精を呼び出して踊らせるメヌエット。

〈**ハンガリー行進曲**〉は同第1部で、ハンガリーの平原にいる主人公ファウストが軍隊に出会う場面で演奏される曲。もともと、ベルリオーズが演奏旅行中に「ラコッツィ・マーチ」の名でも知られるハンガリーの国民歌を編曲してブダペストで初演し、大成功を収めたものだった。曲は静かに始まるが、しだいに高まっていき、最後のクライマックスへと至る。作曲者のオーケストラ編曲の手腕が存分に発揮された曲である。

作曲年代	1845年11月～1846年10月
初演	1846年12月6日、オペラ・コミック座
楽器編成	フルート2（ピッコロ1）、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ2、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、大太鼓、小太鼓、弦楽

ビゼー

交響曲 第1番 ハ長調

ビゼーといえば《カルメン》（1875）が有名だが、最初期の傑作がこの《交響曲第1番》である。パリ音楽院で学んだ彼は、在学中から先輩作曲家グノーにかわいがられ、小遣い稼ぎに編曲の仕事を回してもらっていた。1855年、グノーの新作の《交響曲第1番ニ長調》の4手ピアノ編曲を依頼された17歳のビゼーは、自分自身でも交響曲の作曲に挑戦し、短期間で書きあげた。できあがった作品は、流麗な美しさをもつ旋律、切れ味のよいリズム、管楽器のみごとな扱い方など、ビゼーの個性がすでに現れており、グノーをしのぐ魅力的な交響曲となっている。

ところが、ビゼーは生前、この曲を世に出すべきものとは評価せず、出版も演奏もしなかった。それが「発見」されたのは、1933年、作曲家のレナルド・アーンがパリ音楽院図書館にビゼーの手稿譜を寄贈した折のこと。それを知った指揮者ワインガルトナー

は自費でパート譜を作って初演し、この作品はようやく知られるようになった。

曲は4つの楽章からなる。

第1楽章　アレグロ・ヴィーヴォ、ハ長調、2/2拍子、ソナタ形式。歯切れのよい第1主題と表情豊かな第2主題をもつ。

第2楽章　アダージョ、イ短調、9/8拍子、3部形式。オーボエの主題が美しい。

第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ、ト長調、3/4拍子。若さにあふれたスケルツォ楽章。

第4楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ、ハ長調、2/4拍子、ソナタ形式。無窮動風の第1主題となめらかな第2主題が軸となる。

作曲年代	1855年10月29日に着手、11月に完成
初演	1935年2月26日、フェリックス・ワインガルトナーの指揮、バーゼル
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

ドビュッシー

牧神の午後への前奏曲

ドビュッシーは若いころから音楽以外の諸芸術にも深い関心をもち、文学者や画家、彫刻家たちのグループと交際していた。なかでも、象徴派の詩人として知られるステファヌ・マラルメとは親しく、毎週火曜日にマラルメの家で開かれていた集いには、唯一の音楽家として参加していた。彼はマラルメの詩『牧神の午後』を「自由に絵解きした」作曲を試み、暑くもの憂い夏の午後をバックに展開する、牧神のさまざまな欲望と夢を音のキャンバスに描いた《牧神の午後への前奏曲》が生まれた。1894年暮れに行われた初演は非常に好評で、ドビュッシーは人生初の大成功を味わった。

《牧神の午後への前奏曲》によって、ドビュッシーは伝統的な長調と短調のシステムから自由になり、音色の価値を高め、形式的に自由で、より即興的な要素を重んじた様式を確立し、現代音楽に通じる道を開いた。

冒頭、独奏で始まるフルートの調べから、すでにドビュッシーの新しい世界が始まる。この主題はフルートのために書かれたもので、楽器の音色と切っても切れない関係にある。この旋律は装飾され、拡大され、断片化され、そこから即興性が生まれる。

作曲年代	1891～1894年
初演	1894年12月22日、ギュスターヴ・ドレの指揮、パリ、サル・ダルクールで開かれた国民音楽協会のコンサートにおいて
楽器編成	フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、アンティーク・シンバル、ハープ2、弦楽

劇的交響曲「ロメオとジュリエット」作品17（抜粋）

ベルリオーズは生涯に4曲の交響曲を残した。《ロメオとジュリエット》はそのうちの3曲目にあたり、オーケストラと合唱、独唱のために書かれている。原作は、イギリスの文豪シェークスピアの代表作で、モンタギュー家のロメオとキャピュレット家の娘ジュリエットが、両家が敵対するなかで愛し合う悲劇を描いている。

ベルリオーズがシェークスピアのとりこになったのは1827年、パリのオデオン座で英国劇団による公演に接したときのこと。その折、ジュリエット役を演じていた女優ハリエット・スミッソンこそ、有名な《幻想交響曲》（1830）において主人公の芸術家（＝ベルリオーズ）が思いを寄せるも裏切られる相手として描かれ、後に彼の妻となった女性だった。それ以来、ベルリオーズは『ロメオとジュリエット』を音楽化する構想を温めていた。

1838年12月、名ヴァイオリニストのパガニーニから、「ベートーヴェンの後継者はあなたしかいない」という手紙とともに2万フランを贈られたベルリオーズは、勇んで《ロメオとジュリエット》の作曲に取りかかり、作品をパガニーニに献呈した。

作品は7つの部分から成り、各部分に標題がつけられ、あらすじが書かれている。終結部だけはオペラ風だが、作曲者自身がこれは「合唱を伴った交響曲である」と強調しているように、重要な部分は管弦楽で表現されており、今回のようにコンサート・ピースとして演奏されることも多い。

ロメオひとり～悲しみ～遠くから聞こえてくる音楽会と舞踏会、キャピュレット家の宴会
ジュリエットに恋するロメオの姿がヴァイオリンのメランコリックな旋律によって表現された後、キャピュレット家の大舞踏会の様子が華やかに描かれる。ロメオはジュリエットの姿を求めて舞踏会に忍び込む。

愛の場面　アダージョの〈愛の場面〉は全曲の中で、もっとも重要な部分となっている。ここでは、オーケストラだけで、ロメオとジュリエットの愛が熱く歌いあげられる。

マブ女王のスケルツォ　シェークスピアの原作では第1幕に登場する夢の妖精、マブ女王をオーケストラで描いている。ベルリオーズならではの効果的かつ独創的なオーケストラの扱い方がみごとである。

作曲年代	1839年1～9月
初演	1839年11月24日、作曲者自身の指揮、パリ音楽院のホールにて
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン1）、クラリネット2、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、アンティーク・シンバル、ハープ2、弦楽

PROGRAM

C

第1922回

NHKホール

10/18 金 7:00pm

10/19 土 3:00pm

指揮 | トゥガン・ソヒエフ | 指揮者プロフィールは p.8

ピアノ | ニコラ・アンゲリッシュ★

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

バラキレフ（リャプノーフ編）
東洋風の幻想曲「イスラメイ」［9′］

ラフマニノフ
パガニーニの主題による狂詩曲
作品43★［24′］

――休憩（20分）――

チャイコフスキー
交響曲 第4番 ヘ短調 作品36［43′］

Ⅰ アンダンテ・ソステヌート―モデラート・コン・アニマ
Ⅱ アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ
Ⅲ スケルツォ：ピチカート・オスティナート：アレグロ
Ⅳ 終曲：アレグロ・コン・フオーコ

Artist Profile

ニコラ・アンゲリッシュ（ピアノ）

© Jean-François Leclercq / Erato

1970年、アメリカに生まれ、5歳でピアノを始める。13歳でパリ国立高等音楽院に入学し、アルド・チッコリーニ、イヴォンヌ・ロリオ、ミシェル・ベロフ、マリー・フランソワーズ・ビュケら名ピアニストのもとで学んだ。1994年にジーナ・バッカウアー国際ピアノ・コンクールに優勝。その後は、2003年にレオン・フライシャーの推薦でルール・ピアノ・フェスティバルにおける新人賞を受賞したほか、2013年にはフランスのヴィクトワール・ド・ラ・ミュジークより年間最優秀器楽奏者に選ばれた。世界の著名指揮者やオーケストラと共演し、ヴェルビエ音楽祭やルガーノ音楽祭にも定期的に出演。2009年にはBBCプロムスへデビューを果たした。

初来日は、2004年のクルト・マズア指揮フランス国立管弦楽団の日本ツアーへの出演。NHK交響楽団とは今回が初共演となる。

古典派やロマン派のレパートリーの解釈に定評があり、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲や、リスト《巡礼の年》全曲などの演奏会が好評を博す。20・21世紀の音楽にも関心を寄せ、ラフマニノフ、

プロコフィエフ、ショスタコーヴィチなどの作品にも取り組む。ソロや協奏曲はもちろん、室内楽も精力的に行っており、録音も多い。

［高坂はる香／音楽ライター］

Program Notes｜高橋健一郎

ロシア音楽の王道を行く作曲家たち、ミリー・バラキレフ（1837〜1910）、セルゲイ・ラフマニノフ（1873〜1943）、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜1893）による、充実した内容を誇る3曲を聴く。東方的要素、豊かな叙情性、深いメランコリーなど、典型的なロシア音楽の特質の最上の例が盛り込まれており、ロシア音楽の多面的な魅力を味わえるだろう。

バラキレフ（リャプノーフ編）

東洋風の幻想曲「イスラメイ」

本作はピアノ独奏曲が原曲である。ロシアの民謡など伝統的な音楽を使って新しい国民音楽を創り出そうとしたバラキレフの関心は、ロシアのみならず、コーカサスなど東方の音楽にも向けられた。バラキレフは、数度訪れたコーカサスの荘厳で豊かな自然、そしてそれと調和して生きる住民の美しさに強烈な印象を受けてこの曲を作曲したという。

第1主題はコーカサスの「レズギンカ」と呼ばれるリズミカルで勇壮な舞曲が基になっている。中間部には優しく明るい第2主題が現れるが、これはバラキレフがモスクワでクリミア出身のアルメニア人俳優から教わったクリミア・タタールの恋歌からの引用である。

1912年、マリインスキー劇場の慈善バレエ公演に際し、東方的主題に基づく曲が必要となり、《イスラメイ》に白羽の矢が立った。当初は別の作曲家の編曲版が想定されていたが、バラキレフを師と仰ぐリャプノーフ（1859〜1924）が名乗りを上げ、自身の編曲版を提案した。彼の管弦楽編曲はバラキレフのオーケストレーションの様式に倣いながら、打楽器をふんだんに使い、原色使いのような濃厚な色彩感を前面に出し、コーカサス地方の色濃い自然や人々の陽気な踊りの姿を効果的に描き出している。

作曲年代	［ピアノ独奏用原曲］1869年8〜9月、1902年に改訂　［管弦楽編曲］1912年
初演	［ピアノ独奏用原曲］1869年12月12日（旧ロシア暦11月30日）、ニコライ・ルビンシテインのピアノ、サンクトペテルブルクの無料音楽学校の演奏会にて　［管弦楽編曲］1912年3月23日（旧ロシア歴10日）、ニコライ・チェレプニンの指揮、マリインスキー劇場、サンクトペテルブルク
楽器編成	フルート2、ピッコロ2、オーボエ1、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、Esクラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、ハープ2、弦楽

パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

ラフマニノフは1917年のロシア革命後にロシアを離れ、1918年アメリカに移住した。そこでは、演奏活動に忙殺されたほか、インスピレーションの源泉であった祖国ロシアの大地から切り離されてしまったことで、作曲活動は停滞しがちになった。そのような中、1930年代初めにスイス・ルツェルンに別荘地を購入し、「セナール」と名づけ、1934年から家族でそこに滞在する。セナールは、ロシア時代に幸せな時を過ごした別荘地イワノフカを思い起こさせる環境であり、1934年夏、この地でラフマニノフは本作の創作に集中的に取り組んだ。

曲は序奏と主題、24の変奏からなる変奏曲の形式をとる。主題はパガニーニのヴァイオリンのための《24の奇想曲》の第24番の主題であり、リストやブラームスなども使用したおなじみの旋律である。あえて大作曲家たちによって用いられてきたこの主題を取り入れている点に、ラフマニノフの並々ならぬ創作意欲と自信のほどがうかがえる。

1937年、ラフマニノフは振付師フォーキンにこの曲のバレエ化を持ちかけた。その際、この曲の内容について、「パガニーニがヴァイオリンの超絶技巧を身につけ、女性を手に入れるために悪魔に魂を売った」という伝説の再現だと説明している。曲は切れ目なく演奏されるが、このストーリーに基づいて大きく3つの部分に分けることが可能である。序奏から第10変奏までがパガニーニと悪魔のやりとりであり、第11変奏から第18変奏までは恋愛のエピソードと見なせる。第19変奏以降では、悪魔に魂を売り渡して手に入れたパガニーニの超絶技巧が誇示される。なお、グレゴリオ聖歌《ディエス・イレ(怒りの日)》の旋律が第7変奏以降たびたび出てくるが、これは悪魔を表す。

曲全体を通して、鋭いリズムや和声の衝突などが目立つが、それでも大衆の人気を勝ち得ているのは、主題のなじみ深さと、有名な第18変奏の極め付きの甘美な叙情性のおかげであろう。ラフマニノフが叙情的な曲調にしばしば用いた変ニ長調で書かれたこの第18変奏の旋律は、主題の旋律の上下行を逆さまにし、短調を長調に変えたものである。このアイディアについては、親友のホロヴィッツに「シューマンもブラームスも思いつかなかったすごいアイディアが浮かんだ」「この第18変奏が曲全体を救ってくれる」と述べたというエピソードが知られている。

作曲年代	1934年7月3日〜8月18日
初演	1934年11月7日、作曲家自身のピアノ独奏、レオポルド・ストコフスキーの指揮、フィラデルフィア管弦楽団、ボルティモア
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、グロッケンシュピール、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、シンバル、大太鼓、ハープ1、弦楽、ピアノ・ソロ

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36

本作は1877年のほぼ1年間を費やして作曲された。この時期は露土戦争が勃発(ぼっぱつ)し、チャイコフスキーは強い不安を抱いていたという。さらに、私生活においては、ミリュコーヴァという女性と結婚するも、すぐに破局。精神的な危機を経験した。この交響曲の主題は「運命」であり、運命に疲弊(ひへい)した状態から希望へ向かうという図式が見られるが、そこにこの社会的危機と精神的危機が多かれ少なかれ反映されていると考えられる。

また、この曲が生まれた背景として、ナジェジダ・フォン・メックという大富豪の未亡人がこの年にチャイコフスキーへ莫大な経済支援を申し出たことも挙げられる。経済面の不安から作曲家は解放され、大作の作曲に集中することが可能になったのである。チャイコフスキーは感謝の気持ちからこの曲の楽譜に「わが最良の友に」と献辞を記した。また、メック夫人への手紙で本作を「我々の交響曲」と呼び、作品の標題内容を詳しく伝えている。以下、そこでの作曲家の言葉を引用しながら、各楽章の内容を見よう。

第1楽章　アンダンテ・ソステヌート、3/4拍子―モデラート・コン・アニマ、9/8拍子、ヘ短調、ソナタ形式。冒頭のファンファーレのモチーフは「幸福の追求を妨げる運命の力」であり、曲全体の核となる。第1主題は憂鬱(ゆううつ)な感情に満ち、第2主題は儚(はかな)い夢を表す。人生が、過酷な現実と儚い幸福の夢が果てしなく交替するものとして描かれる。

第2楽章　アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ、2/4拍子、変ロ短調、3部形式。「仕事に疲れ、本を手にひとり座っているが、知らぬうちに落としてしまう、そのような晩方に感じるメランコリー」が描かれる。

第3楽章　スケルツォ：ピチカート・オスティナート：アレグロ、2/4拍子、ヘ長調、複合3部形式。この楽章は「特定の感覚を表さず」、「気まぐれなアラベスク」のよう。

第4楽章　終曲：アレグロ・コン・フオーコ、4/4拍子、ヘ長調、ロンド形式。「自分自身の中に喜びを見出せないのなら、周りを見渡し、民衆の中に入りなさい」、「他人の喜びの中で喜びなさい。そうすれば生き続けることができる」。これが、運命に苦しむ人間の救いに関するチャイコフスキーの答えである。旋回する力強い第1主題、ロシア民謡《白樺は野に立てり》に基づく第2主題、陽気な民衆の踊りの第3主題、この3つの主題が繰り返し奏される。その後、第1楽章冒頭の「運命」のモチーフが威嚇(いかく)するように現れるが、この陽気な3つの主題によって追い払われ、高揚して曲が閉じられる。

作曲年代	1877年初頭～1878年1月9日（旧ロシア暦1877年12月28日）
初演	1878年2月22日（旧ロシア暦10日）、ニコライ・ルビンシテイン指揮、ロシア音楽協会モスクワ支部交響楽演奏会にて
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、トライアングル、大太鼓、シンバル、弦楽

N響百年史

第六回 『セロ弾きのゴーシュ』と映画館のオーケストラ

片山杜秀 Morihide Katayama

二〇二六年のN響創立百周年に向け、NHK-FM「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしてもお馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、N響の歴史を時代背景とともに、独自の視点からひもときます。今シーズンは職業オーケストラの黎明期から山田耕筰、近衛秀麿の登場、N響の前身である新交響楽団の誕生までを描く予定です。前回取り上げた百貨店の少年音楽隊に引き続き、今月はサイレント(無声)映画館の楽団を職業オーケストラの前身のひとつとして紹介します。

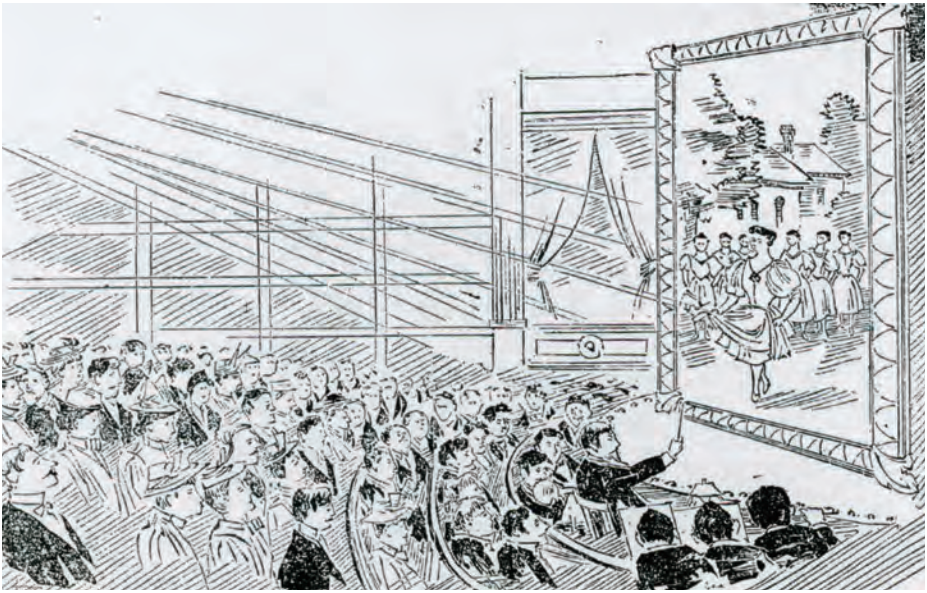
無声映画の時代

宮沢賢治の童話『セロ弾きのゴーシュ』の書き出しはこうである。「ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした」。

「活動写真館」とは映画館。「セロ」はチェロ。なぜ映画館にチェリストが雇用されているのか。無声映画の時代だったからである。

日本最初の常設映画館は東京浅草の電気館だという。1903(明治36)年にできた。その後、映画は次第に広まった。日露戦争後の1910年前後からは国産の時代劇映画も人気を博するようになった。1910年代前半、つまり大正のはじめには、東京なら浅草や神田、大阪なら道頓堀(どうとんぼり)、神戸なら新開地などに、映画館街ができあがった。この国の映画産業は、日露戦争前後から第1次世界大戦期にかけて飛躍的に発達し、それは、特に大都市部に、百貨店や雑誌やレコードや西洋風の新しいお芝居やヴァイオリンのような西洋楽器が根付いていく過程と、ダブっていた。富裕なブルジョワ市民層から庶民大衆にいたるまで、教養と娯楽の革命が、質と量の両面で起きていたのが、この時代だった。その花形の座に映画はいた。

映画の歴史は技術的には映像が先行した。フィルムに映像だけでなく音も合わせて記録する技術はなかった。レコードとフィルムの回転を同期させる実験もなされたが、無理があった。映画は映像だけの時代が長く続いた。無声映画と呼ぶ。欧米のトーキー映画(有声映画)が日本に輸入されるようになったのは、1929



1896年4月、ニューヨークで行われたエジソン発明の活動写真「ヴァイタスコープ」の上映。前方の席には指揮者と音楽家たちが陣取って演奏している（1897年3月4日付読売新聞に掲載）｜ 提供：ジャパンアーカイブス

（昭和4）年あたりからだろう。和製の最初の完全なトーキー映画は松竹の作った『マダムと女房』。1931年の作品である。しかし、その時期にいっせいに無声から有声に変わったわけではない。徐々にである。つまり、日本のサイレント映画の時代は約30年も続いた。別に日本が遅れていたわけではない。欧米の映画技術に連動して、そうした経過をたどったのである。

すると、およそ30年ものあいだ、映画館の中はひたすら静かだったのか。そんなことはなかった。そもそも映写機の作動音がかなりやかましい。映画館内とは騒音の鳴り響く場所だった。騒音を聴かせていては、娯楽は普通、成り立たない。映写機の音を覆い隠すように楽しい音を別に流さなければならない。

そこで、まともな映画館なら生演奏を必須とした。スクリーンの前に演奏場所を設けて楽団の生演奏を付ける。オペラやバレエの劇場の要領である。小さな映画館だと5、6人、大きい映画館だと25〜30人程度、中くらいの映画館なら楽士の人数もその真ん中くらいが、大正時代にはおよその標準になった。

映画館はコンサートホール

映画館は毎日やるのだから、楽士も必ず毎日揃（そろ）っていなければならない。それなりの待遇できちんと雇用して、楽士たちに責任感を持ってもらい、アンサンブルの向上にも努めてもらわなくては、無声映画の興行は成り立たない。エキストラだけというわけにはゆかない。映画館は全国にある。大正から昭和にかけて、民間で演奏家として生きようとしたら、大口の雇

用元は映画館であった。

たとえば大正の終わり、NHK交響楽団がついに生まれようとする頃に、無声映画館の楽士は日本全国でどのくらいいたものか。その時代に朝日新聞社が出していた映画年鑑には楽士の名簿が付いていて、北海道から沖縄までの映画館専属の約500人が載っている。けれど、それは氷山の一角だろう。大正末年、日本に映画館は約1000館あった。楽士の人数も何千人かでないと勘定が合わない。とてつもない数だ。そこには、小学校を出て、いきなり映画館で楽器を練習させられたような、とても下手な演奏家がかなり含まれていただろう。だが、陸海軍軍楽隊、音楽学校、三越百貨店やいとう呉服店の少年音楽隊（第五回参照）、ホテルや豪華客船の楽団等々の出身者、つまり当時としては腕のいいプレイヤーも多く含まれていた。

そして、多めに楽士のいる映画館なら、必ず指揮者も要る。楽長と呼ばれた。冒頭に引用した『セロ弾きのゴーシュ』の、ゴーシュは「いつでも楽長にいじめられるのでした」という箇所の「楽長」とは、そういう人のことだ。

映画館の楽長というと、真っ暗な館内で、映画に合わせて棒を振っている地味で目立たぬ姿を想像なされる向きもあるかもしれない。だが、そうではない。有名な映画館となると、映画よりも楽長の人気で観客を集めることもあった。というか、人気楽長のいる映画館が、有名な映画館なのであった。

そうそう、日本独特の映画興行の文化として、活動弁士のことも忘れてはいけない。落語や講談、あるいは人形浄瑠璃（じょうるり）のような語り物の文化が映画と合体し、活動写真の映る銀幕の横で、筋書きを説明し、声色を使って台詞（せりふ）をやり、喝采（かっさい）を博する。それが活動弁士だ。無声映画時代の映画館とは、映画と生のパフォーマンスをトータルで楽しむ、演芸場やコンサートホールまでを兼ねた空間だった。名のある大きな映画館は、とてつもなくごちゃごちゃとして贅（ぜい）沢（たく）な場所だった。そこを仕切るツー・トップは弁士と楽長であった。

宮沢賢治にチェロを教えた新響楽員

映画館で楽長は何をするか。単に映画上映中に弁士と息を合わせながら指揮をしていればよいというわけではない。そもそも映画の配給会社はたいていの場合、フィルムだけを映画館に回してくる。たまに欧米の大作映画で、シーンごとに演奏楽曲を指定して、オリジナルの楽譜を付けてくるものもあったが、そういうことは例外である。普通だと、付ける音楽は映画館の勝手だ。楽長の権限だ。楽長は、筋書きや画面の様子を考慮し、選曲する。映画館のオーケストラを仕込んで既成曲のレパートリーをなるたけ多く作り、映画に合わせてそれらを切り貼りして演奏してゆく。映画館の楽団の編成に合わせるための編曲作業も必要となる。

はて、映画館で奏でられる曲はどんなものだったろう？ ワルツやポルカ、オペラの序曲や前奏曲や間奏曲。演奏時間の長すぎないクラシック音楽の名曲が基本だった。

それから、演奏家の訓練もむろん、楽長の仕事だ。無声映画館の必要とする楽士は、映画の発達とともにうなぎ上りとなり、どこかで訓練済みの、いきなりよく弾けるプレイヤーばかり集めるのは、高給を保証する大映画館以外では難しかった。特に地方都市だと初心者が相当混じってしまう。楽長は新人楽士をしごかなくてはいけなくなる。楽長といえばしごく人というイメージが生まれる。ゴーシュが「楽長にいじめられる」という『セ

ロ弾きのゴーシュ』の設定は、宮沢賢治の独創と言うよりも、日本中の映画館で毎日のように繰り返されている当たり前の光景だった。

そうした楽団の一切合切を担う楽長の華といえば、幕間での演奏である。映画館はのべつ幕なしに上映を続けているわけではない。休憩時間がある。館内は明るくなる。そこで楽長は楽団を率いて、ミニ・コンサートを開く。「休憩奏楽」と呼ばれた。弁士もいない。映画も映らない。映画館はそのとき演奏会場になり、主役はもう音楽である。そういうときに演奏するのも、当然ながらクラシック音楽が中心だ。

宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』にもこんなくだりがある。「ひるすぎみんなは楽屋に円(まる)くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲の練習をしていました」。「休憩奏楽」ではなく「出張演奏」のための練習のようである。「第六交響曲」とはベートーヴェンの《田園》のことだろう。無声映画館のオーケストラのレパートリーには、ベートーヴェンの交響曲があってもおかしくなかった。

無声映画館の人気楽長や名物楽長とはどんな人々だったか。浅草だと、松竹館が島田晴誉(はるたか)、富士館が小沢淡山、電気館が黒田周造、帝国館が遠藤三郎。みんな海軍軍楽隊の指揮者から転じた人だ。神田の日活館は田中豊明。田中も海軍軍楽隊の出で、軍楽隊の指導者時代には、弦楽器の訓練も行き届き交響楽団化した海軍軍楽隊を指揮して、ドヴォルザークの《交響曲第9番「新世界から」》を日本初演してもいる。大物だ。

銀座の金春(こんぱる)館だと波多野福太郎。芝の芝園(しばぞの)館なら前田璣(たまき)。この2人は東洋音楽学校(現東京音楽大学)の出身。そして前田は、NHK交響楽団が新交響楽団として結成されたときの、初代コンサートマスターである。

ところで、宮沢賢治はなぜ『セロ弾きのゴーシュ』を書いたのか。もちろん彼自身がクラシック音楽の愛好家で、自らチェロを練習してもいたからだが、賢治は大正と昭和の元号の変わり目に東京で、ごく短期間、チェロの個人レッスンを受けている。習った先生は大津三郎。新交響楽団のメンバーだった。楽員表ではトロンボーン奏者になっているが、チェロも担当していた。大津はもともと海軍軍楽隊の隊員で、トロンボーンとチェロの両方を習得していた。軍楽隊を除隊してからは、波多野福太郎楽長のもとで無声映画館の楽団で弾いていた。そういうキャリアの楽団員が初期のN響には何人もいた。

とにかく『セロ弾きのゴーシュ』はN響と縁があり、NHK交響楽団誕生の大きな下地は、大正時代に全国で膨大(ぼうだい)に展開された映画館の楽団の演奏活動があった。クラシック音楽を近代日本に広めた最大の功労者は無声映画であったのかもしれない。

文｜片山杜秀(かたやま もりひで)

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。2008年、『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞を受賞。『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』『「五箇条の誓文」で解く日本史』ほか著書多数。

次回予告　次号では、ついに山田耕筰が登場。大正初年に帝国劇場で公演を行った「東京フィルハーモニー会」との活動を取り上げます。

PROGRAM

A

Concert No.1921 NHK Hall

October

5(Sat) 6:00pm

6(Sun) 3:00pm

conductor | Michiyoshi Inoue

timpani | Toru Uematsu/ Shoichi Kubo

concertmaster | Rainer Küchl

Philip Glass
Concerto Fantasy for Two Timpanists and Orchestra (2000)
[27′]

Ⅰ ♩=144
Ⅱ ♩=96～104
Ⅲ ♩=176

— **intermisson** (20 minutes) —

Dmitry Shostakovich
Symphony No. 11 G Minor Op. 103 "The Year 1905" [60′]

Ⅰ Palace Square
Ⅱ Ninth of January
Ⅲ Eternal Memory
Ⅳ The Tocsin (Alarm Bell)

Artist Profiles

Michiyoshi Inoue, conductor

© 浦本ゆこに

Michiyoshi Inoue made his debut with the NHK Symphony Orchestra by conducting the May 1978 subscription concert when he was 31 years old. Since then he has been guest-conducting the orchestra for more than 40 years. His all-Shostakovich program of the November 2016 subscription series was named best concert of the year by many audience members and music critics.

He was Music Director and Chief Conductor of the Kyoto Symphony Orchestra from 1990 to 1998, during which time he took up Shostakovich series in an effort to accomplish an achievement no other professional Japanese orchestra had ever done before. He so admired the composer that he once said that "Shostakovich is I myself!" From November to December of 2007, he performed all of Shostakovich's symphonies at Tokyo's Hibiya Public Hall, where many of the composer's works were given Japanese premiere performances in the past. In

2016, he conducted Shostakovich Symphonies Nos. 9 and 15 at the same venue, and re-recorded them. Moreover, he made a complete CD set of Shostakovich's symphonies at his own expense. From April through October 2014, he took a rest in order to receive treatment for pharyngeal cancer. When he resumed his work, he said "every scene looks fresh," and he took a different approach even to the works that he had often conducted, attracting audiences more than ever before with his more deeply defined sound. He will conduct Shostakovich Symphony 11 "The Year 1905" and a work of Philip Glass, a modern day American composer, an unexpected combination of composers of the superpowers in the Cold War era. He will surely light up the audience by drawing out the very best of the NHK Symphony Orchestra musicians who will work as soloists.

Toru Uematsu, timpani

Toru Uematsu was born in Tokyo, and graduated from Kunitachi College of Music and its postgraduate course. He studied percussion under Tomoyuki Okada, Mutsuko Fujii and Peter Sondermann. He joined the NHK Symphony Orchestra in 1993, and now serves as its principal timpanist. He went to Berlin in 1998 on the NHK Symphony Orchestra's overseas study program to work under the tutelage of Rainer Seegers, principal timpanist of the Berliner Philharmoniker. He often works overseas; he worked with the Berliner Fagottquartett to give the world premiere performance of *Mehr Licht* by Junnosuke Yamamoto at the concert to mark the 250th anniversary of Goethe's birth, and also appeared at the Patras International Festival in Greece. With the NHK Symphony Orchestra, he appears as soloist in many works including Takemitsu *From me flows what you call Time*. He teaches at Kunitachi College of Music, Senzoku Gakuen College of Music, and Sapporo Otani University, continues to study how percussion music influences infants, and visits kindergartens and special needs schools as well as disaster-affected areas to encourage children through music.

Shoichi Kubo, timpani

Shoichi Kubo was born in Kagoshima Prefecture, and studied under Tsutomu Noguchi, Atsushi Sugawara and Mariko Okada at Tokyo College of Music. In 1987, he went to Berlin to study under Oswald Vogler at the Berlin University of the Arts, and also played at the Deutsche Oper Berlin. In the early 1990s, he received tutelage from Peter Sondermann, principal timpanist of the Sächsische Staatskapelle Dresden, who was in Japan at the invitation of the NHK Symphony Orchestra. Mr. Kubo joined the NHK Symphony Orchestra in 1993, and is now its principal timpanist. He worked with Martha Argerich and Nelson Freire at the MUSIC FESTIVAL Argerich's Meeting Point in Beppu in 2001, and in 2010, he appeared in the Schwetzingen Festival with Radio-Sinfonieorchester Stuttgart des SWR as its guest timpanist. In 2017, he held a master class at

the Maastricht Academy of Music in Holland. He is a professor at Tokyo College of Music and also teaches at Musashino Academia Musicae.

[Michiyoshi Inoue by Takuo Ikeda, music journalist]

Program Notes | Akira Ishii

Philip Glass (1937–)

Concerto Fantasy for Two Timpanists and Orchestra (2000)

Philip Glass, born on January 31, 1937, is an American composer of modern music, often regarded as one of the most important composers of the second half of the twentieth century. He writes music in the style that has become known as Minimalism, a music creation concept utilizing limited musical materials. Those compositions written with this idea exhibit in many cases figures and motifs comprising repeated notes. Glass's works are in general no exception. He indeed describes himself as a composer of "music with repetitive structures." Glass has written numerous compositions including operas, symphonies, concertos, and string quartets and other chamber music pieces. He has also composed music for numerous films.

Glass's Concerto Fantasy for Two Timpanists and Orchestra was written in 2000. It was composed for the timpanist Johnathan Haas, who was one of the featured soloists at the premiere of the work. It was commissioned jointly by the American Symphony Orchestra, the Peabody Symphony, the Milwaukee Symphony, the St. Louis Symphony, and the Phoenix Symphony. The first performance took place on November 19, 2000 at Avery Fisher Hall at the Lincoln Center in New York City, with Leon Botstein conducting the American Symphony Orchestra. The piece is scored for two solo timpanists, piccolo, two flutes, two oboes, E-flat clarinet, two clarinets, bass clarinet, two bassoons, four French horns, three trumpets, three trombones, tuba, harp, xylophone, glockenspiel, snare drum, tenor drum, bass drum, triangle, chimes, wood blocks, tambourine, cymbal, suspended cymbal, tam-tam, marimba, vibes, piano and strings. There is also a wind ensemble version of the piece, created by Mark Lortz in 2004.

About his Concerto Fantasy Glass has noted the following: "Jonathan Haas approached me almost ten years ago with an invitation to write a Timpani Concerto for him. It seemed we were in agreement to begin our project when a series of operas and symphonic commissions led to a series of postponements. Now, years later, the work is finally completed, a three movement concerto with cadenza. It has also grown into a "double" concerto requiring two timpanists playing a total of nine timpani between them."

Dmitry Shostakovich (1906–1975)

Symphony No. 11 G Minor Op. 103 "The Year 1905"

Dmitry Shostakovich, one of the most important Russian (Soviet) composers of the twentieth century, was a prolific composer. He composed, for instance, at least four operas, three ballets, fifteen symphonies, six concertos (two each for piano, violin, and cello), a large number of suites and other types of orchestra pieces, and many chamber music compositions, including fifteen string quartets. He also wrote music for numerous films. Shostakovich, in

general, follows the tonal language established in the late nineteenth-century, thus not moving away completely from tonality (even though his compositions sometimes show elements of atonal music). He was strongly influenced by the composers he admired, both Russians and others from different regions. Among the Russian composers, Shostakovich spoke highly of Modest Mussorgsky, Sergei Prokofiev, and Igor Stravinsky (whom Shostakovich seems to have despised on a personal level). He was also interested in the composers of the past like Bach and Beethoven. As a result, Shostakovich reworked a number of compositions of other musicians. He re-orchestrated, for instance, two operas by Mussorgsky, *Boris Godunov* and *Khovanshchina*, as well as works by Robert Schumann, Domenico Scarlatti, and even Johann Strauss II.

Symphonies always played an important role in Shostakovich's *oeuvre*. He composed them consistently throughout his career. His Symphony No. 11 in G Minor, Op. 103 "The Year 1905" was written in 1957. Its premiere took place on October 30 of the same year, with Natan Rakhlin conducting the USSR Symphony Orchestra. As indicated in the subtitle of the symphony, the work was supposed to commemorate the tragic event of January 9 (January 22, New Style), 1905, on which government officials ordered an attack on demonstrators in St. Petersburg, resulting in the loss of many lives. In reality, however, the symphony could have been Shostakovich's reaction to the Soviet invasion of Hungary in an attempt to suppress the Hungarian Revolution of 1956. The symphony was received very well by the public as well as Soviet officials, ironically leading Shostakovich to earn a Lenin Prize in April, 1958. The piece is scored for three flutes (the third doubling piccolo), three oboes (the third doubling English horn), three clarinets (the third doubling bass clarinet), three bassoons (the third doubling contrabassoon), four French horns, three trumpets, three trombones, tuba, timpani, triangle, snare drum, cymbal, suspended cymbal, bass drum, tam-tam, xylophone, tubular bells, harps, celesta, and strings.

Shostakovich's Symphony No. 11 comprises four movements, performed without an interruption. The slow first movement, titled "Palace Square," depicts the morning hours of the bloody day at the square in front of the Tsar's Winter Palace. The music here is quiet with somber and dark sonority that foresees the sad incident that is about to occur. This is further emphasized by motifs played by timpani. The Allegro second movement is titled "Ninth of January" and illustrates the massacre of several hundred people. Here the composer brings back some of the thematic materials he used in the previous movement in addition to the melodies taken from some songs in his *Ten Poems on Texts by Revolutionary Poets* for Chorus and Boys' Chorus, Op. 88. The movement first depicts the demonstrators complaining about the corruption of the government and then the slaughter of the crowd. The Adagio third movement, titled "Eternal Memory," reflects on the tragic event and incorporates the melody of a revolutionary funeral march. The final movement is subtitled "The Tocsin" (Alarm Bell), which previses the 1917 Russian Revolution.

There is no direct evidence in the symphony itself to indicate that the piece is Shostakovich's response to the Soviet invasion of Hungary. According to the composer, however, one of the main subjects of his Symphony No. 11 is "recurrence," undoubtedly referring to the two events in 1905 and 1956. He also says that the symphony "deals with contemporary themes even though it's called '1905,'" hinting that the work is indeed about the suppression of the Hungarian Revolution by the Soviet government.

Akira Ishii

Professor of Keio University. Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

PROGRAM

B

Concert No.1923 Suntory Hall

October

23(Wed) 7:00pm

24(Thu) 7:00pm

conductor | Tugan Sokhiev

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

Hector Berlioz
"La damnation de Faust," dramatic legend Op. 24—"Menuet des follets" "Marche hongroise"
[10′]

Georges Bizet
Symphony No. 1 C Major
[27′]

Ⅰ Allegro vivo
Ⅱ Adagio
Ⅲ Allegro vivace–Trio
Ⅳ Allegro vivace

— intermisson (20 minutes) —

Claude Debussy
Prélude à l'après-midi d'un faune
[10′]

Hector Berlioz
"Roméo et Juliette," dramatic symphony Op. 17 (excerpts) [35′]

Roméo seul–Tristesse–Bruits lointains de concert et de bal–Grande fête chez Capulet
Scène d'amour
Le reine Mab ou la Fée des Songes (Scherzo)

B

23 & 24. OCT. 2019

Artist Profile

Tugan Sokhiev, conductor

©Mat Hennek

Tugan Sokhiev was born in North Ossetia in 1977, and studied under Ilya Musin and Yuri Temirkanov at the St. Petersburg Conservatory. He continually made international debuts, starting with the Welsh National Opera in 2002, followed by the Metropolitan Opera House and the Aix-en-Provence Festival. In 2005, he was appointed Principal Guest Conductor of the Orchestre National du Capitole de Toulouse, and assumed the position of Artistic Director in 2008. In addition, he has been Music Director and Principal Conductor of the Bolshoi Theatre since 2014, and concurrently

served as Music Director of the Deutsches Symphonie-Orchester Berlin (DSO) from the 2012–16 seasons. In recent years, he has made numerous guest appearances with many of the world's prestigious orchestras including the Berliner Philharmoniker and the Wiener Philharmoniker, and he quickly rose to prominence in the 21st Century as a conductor who has attracted the attention of critics and music lovers all over the world.

He has frequently worked with the NHK Symphony Orchestra since his first collaboration in 2008, and since 2016, he has returned to the orchestra's podium every season to conduct a mainly Russian and French repertoire. He has won artistic acclaim by drawing out colorful sounds from the orchestra.

[Tugan Sokhiev by Mitsunori Eto, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Hector Berlioz (1803–1869)

B

"La damnation de Faust," dramatic legend Op. 24 –"Menuet des follets" "Marche hongroise"

23 & 24. OCT. 2019

The tale of *Faust* is based on a German legend that has been popular since the end of the sixteenth century. After Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) published the first part of his version of it in 1808, it instantly became an inspirational source for a countless number of composers, resulting in creation of numerous types of musical compositions. Those who wrote music utilizing the literary theme include Franz Schubert, Ludwig van Beethoven, Robert Schumann, Franz Liszt, Charles Gounod, Richard Wagner, Gustav Mahler, Igor Stravinsky, and Hector Berlioz.

Berlioz's *La damnation de Faust* (*The Damnation of Faust*), Op. 24 is a large-scale composition for four vocal soloists, children's chorus, mixed chorus, and orchestra. It can be, as the composer calls it a dramatic legend, staged like an opera. Berlioz indeed attempted that once, but the production seriously disappointed him, making him realize that the composition should be presented only as a concert piece rather than a theatrical work. Today, instrumental excerpts like *Menuet des follets* (*Will-o'-the-wisp*) and *Marche hongroise* (*Hungarian March*) are often included in the programs of orchestras.

Georges Bizet (1838–1875)

Symphony No. 1 C Major

Georges Bizet entered the Paris Conservatory in 1848 just before the age of ten. A brilliant and promising student, he studied there piano, organ, *solfège*, and counterpoint and fugue, receiving numerous prizes. In 1857 he was awarded the prestigious *Prix de Rome*. Bizet did not follow a career in performance but concentrated his artistic efforts on composing music. However, it was not easy for him to gain a reputation as a composer. His incidental music to *L'Arlésienne* enjoyed some degree of success, but even his last opera *Carmen* was not well received at first (Bizet died well before the opera became everyone's favorite).

Bizet's Symphony No. 1 in C Major is an early work by the composer, written in 1855.

The piece seems to have been a student project—Bizet was still studying composition with Charles Gounod at the Paris Conservatory at that time. The piece very much follows the symphonic writing style of the early nineteenth century. The jubilant opening movement is followed by the slow second movement, in which the solo oboe is featured. The third movement is a Beethoven-like scherzo (but with fewer complex rhythmical figures) with a trio in a country-folk style. The work concludes with a swift movement, which opens with extraordinary fast notes played by the first violins.

Claude Debussy (1862–1918)

Prélude à l'après-midi d'un faune

Claude Debussy's *Prélude à l'après-midi d'un faune* (*Prelude to the Afternoon of a Faun*) is a relatively short orchestral composition but is one of the most popular works by Debussy. He composed it between 1891 and 1894. Its premiere took place in Paris on December 22, 1894. It is a symphonic poem based on Stéphane Mallarmé's poem *L'après-midi d'un faune*. According to Debussy, the piece is "a very free illustration of Mallarmé's beautiful poem," depicting "a succession of scenes through which pass the desires and dreams of the faun in the heat of the afternoon." When Mallarmé heard that Debussy was working on a musical composition inspired by his poem, he was initially skeptical about Debussy's intentions. The poet felt that nothing else was needed to convey the literary message of the work. Mallarmé, however, changed his view when he heard Debussy's piece at its premiere. After the concert, Mallarmé wrote Debussy saying, "I press your hand admiringly."

Hector Berlioz (1803–1869)

"Roméo et Juliette," dramatic symphony Op. 17 (excerpts)

Like his *La damnation de Faust* Berlioz's *Roméo et Juliette*, Op. 17 is a full-scale composition based on a literary work. It is an adoption of William Shakespeare's play *Romeo and Juliet*. Berlioz completed the piece in 1839. It was financially supported in part by Niccolò Paganini, who had commissioned Berlioz to compose *Harold en Italie*, Op. 16. The first performance of *Roméo et Juliette* took place at the Paris Conservatory in a series of three concerts held on November 24 and December 1 and 15 of the same year. Richard Wagner was at these performances and later acknowledged that Berlioz's music inspired him when he was preparing the score of his *Tristan und Isolde*. Berlioz felt that his work was received well at its premiere, but, at the same time, he realized that much of it needed to be altered. He revised the piece on numerous occasions and did not publish it until 1847.

Berlioz's *Roméo et Juliette* comprises three parts, in which there are altogether seven separate sections. The scenes are often depicted by the orchestra alone, making it different from an opera: Berlioz indeed calls the work a dramatic symphony. The dialogue between Romeo and Juliet in the garden and cemetery scenes, for instance, Berlioz avoided utilizing voices to express Romeo's passionate feelings because "it is a symphony and not an opera."

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.48

PROGRAM

C

Concert No.1922 NHK Hall

October

18(Fri) 7:00pm

19(Sat) 3:00pm

conductor | Tugan Sokhiev | for a profile of Tugan Sokhiev, see p.49

piano | Nicholas Angelich★

concertmaster | Ryotaro Ito

Mily Balakirev/ Sergei Liapunov
"Islamey," oriental fantasia [9′]

Sergei Rakhmaninov
"Rapsodie sur un thème de Paganini," Op. 43★ [24′]

— intermisson (20 minutes) —

Peter Ilich Tchaikovsky
Symphony No. 4 F Minor Op. 36
[43′]

Ⅰ Andante sostenuto–Moderato con anima
Ⅱ Andantino in modo di canzona
Ⅲ Scherzo: Pizzicato ostinato: Allegro
Ⅳ Finale: Allegro con fuoco

Artist Profile

Nicholas Angelich, piano

© Jean François Leclercq Erato

American pianist Nicholas Angelich was born in 1970 and started learning the piano at the age of 5. At the age of 13, he entered the Paris Conservatory and studied under prominent pianists such as Aldo Ciccolini, Yvonne Loriod, Michel Béroff and Marie-Françoise Bucquet. He won the International Piano Competition Gina Bachauer in 1994, and the Young Talent Award with the recommendation of Leon Fleischer at the Klavier-Festival Ruhr, and he received the prize of Instrumental Soloist of the Year from the Victoires de la Musique Classique 2013. He has worked with world-renowned conductors and orchestras and has regularly appeared in the Verbier Festival and the Lake Lugano Music Festival. He made his first appearance at the BBC Proms in 2009. He first performed in Japan in 2004 in the Japan tour of the Orchestre National de France led by Kurt Masur. This will be his debut with the NHK Symphony Orchestra. He has a reputation for his renditions of pieces ranging from the Classic to Romantic periods, and has won artistic acclaim for his recitals of Beethoven's complete Piano sonatas and Liszt's *Années de pèlerinage*. He also

shows a interest in 20th and 21st Century music, and has been keen in performing works by Rakhmaninov, Prokofiev and Shostakovich. In addition to his recitals and concerto performances, he also takes part in chamber music concerts and has made numerous recordings.

[Nicholas Angelich by Haruka Kosaka, music journalist]

Program Notes | Akira Ishii

Mily Balakirev (1837–1910)/ Sergei Liapunov (1859–1924)

"Islamey," oriental fantasia

Islamey, oriental fantasia, Op. 18 is a composition for piano by Mily Balakirev, written in 1869 and revised in 1902. Balakirev was the leading member of the group of Russian composers called *The Five* (the others were César Cui, Modest Mussorgsky, Nikolai Rimsky-Korsakov, and Alexandr Borodin). He was strongly influenced by Mikhail Glinka, who in the first half of the nineteenth century made an effort to incorporate folk and indigenous elements into his music. Balakirev decided to compose *Islamey* after he traveled to the Caucasus, an area situated between the Black Sea and the Caspian Sea. According to a letter he wrote in 1892, Balakirev was impressed with "the majestic beauty of luxuriant nature" as well as that of the inhabitants. There he was introduced to Circassian folk tunes; Islamey was one of them. In addition to this "dance-tune," however, he also utilizes a Crimean Tatar melody that was given to him by an Armenian actor. Balakirev's piano piece became an inspiration for many of his contemporaries as well as of composers of later generations, including Sergei Liapunov (1859-1924), who arranged Balakirev's composition for orchestra.

Sergei Rakhmaninov (1873–1943)

"Rapsodie sur un thème de Paganini," Op. 43

Sergei Rakhmaninov's *Rapsodie sur un thème de Paganini* (*Rhapsody on a Theme of Paganini*), Op. 43 is a concerto-like composition for piano and orchestra. It was composed in the summer months of 1934 and premiered on November 7 of the same year in Baltimore, Maryland (USA), with Leopold Stokowski conducting the Philadelphia Orchestra and Rakhmaninov playing the solo part. The work is a set of twenty-four variations based on a theme by Niccolò Paganini (1782–1840), a highly reputable virtuoso violinist who also composed a large number of compositions for violin. It is taken from the last piece of Paganini's 24 Caprices for Solo Violin, Op. 1. The melody has been utilized in numerous works by many different composers, including Johannes Brahms, Frédéric Chopin, and Franz Liszt. Although Rakhmaninov's *Rhapsody* is performed without an interruption, it can be divided into three sections: The first comprising the first ten variations, the second, the following eight, and the third, the last six. The three sections are sometimes regarded comparable to the three movements of traditional concertos.

Besides Paganini's Caprice, Rakhmaninov incorporates into his *Rhapsody* the *Dies irae* (*Day of Wrath*), a tune set to a Latin sequence written in the Middle Ages. Composers in the Renaissance Era frequently adopted it in their Requiem (Mass for the Dead), thus firmly establishing its symbolism for death. In the nineteenth and twentieth centuries, many

composers incorporated it in their secular works to create an intense dramatic effect. They include Hector Berlioz, who used it in the final movement of his *Symphonie fantastique*, Op. 14. One of the slow variation of Rakhmaninov's *Rhapsody* features an upside down version of Paganini's theme. This variation is constructed in a very Romantic manner, exhibiting a wealth of emotion. The sonority created here is very much similar to that of the final measures of Rakhmaninov's Piano Concerto No. 2 in C Minor, Op. 18.

Peter Ilich Tchaikovsky (1840–1893)

Symphony No. 4 F Minor Op. 36

Tchaikovsky wrote numerous types of compositions ranging from solo piano pieces to large-scale theatrical works like operas and ballets. Today, many of his works are extremely popular; even non-regular concertgoers would most likely be able to recognize his ballet pieces—he wrote only three: *Swan Lake*, Op. 20, *The Sleeping Beauty*, Op. 66, and *The Nutcracker*, Op. 71. A number of his orchestral pieces are also very well-known. *The 1812 Overture*, which depicts the Russian defeat of Napoleon's Great Army in 1812, is frequently included in concert programs of pop orchestras, often accompanied by a column of real cannons making a tremendous noise created by blasting gunpowder (these rather overdramatized events are sometimes broadcast on television). Tchaikovsky's Piano Concerto No. 1 in B-flat Minor, Op. 23 as well as his Violin Concerto in D Major, Op. 35 remains one of the favorite pieces of today's concertgoers, and so do his last three symphonies (Symphonies Nos. 4, 5, and 6).

Tchaikovsky's Symphony No. 4 in F Minor, Op. 36 was composed between 1877 and 1878. By then Tchaikovsky was already an established composer; he had completed, for instance, three symphonies, four operas, and *Swan Lake*. The premiere of the symphony took place in Moscow on February 22, 1878 at a concert given by the Russian Musical Society. It was conducted by one of Tchaikovsky's close friends Nikolai Rubinstein, a well-known Russian pianist, conductor, and composer. The composition was dedicated to Nadezhda Filaretovna von Meck, whom the composer calls in the dedicatory words "my best friend." Mdm. Von Meck was indeed much more than Tchaikovsky's acquaintance. First of all, she was his patron—Mdm. Von Meck was a member of the high society and helped artists and musicians. She was particularly enthusiastic about Tchaikovsky's music and provided him with financial support for thirteen years. Moreover, she was his spiritual friend (even though the two never met face to face), helping him going through difficult times especially when Tchaikovsky's marriage ended disastrously.

The symphony consists of four movements. It begins with a fanfare played by French horns and bassoons, followed by trumpets and woodwinds repeating it in a higher register. These opening measures sound profoundly and strongly, but they also carry the feeling of anxiety, representing one of the main moods expressed in the work. A melancholic melody played by the oboe initiates the slow second movement, followed by a scherzo, in which strings play pizzicato throughout. The energetic finale starts off suddenly right after the quiet ending of the previous movement.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.48

公演報告

N響「夏」2019

7月19日、NHKホール

Summer Concert 2019

今年のN響「夏」には、ロシア出身にしてフィンランドで指揮を学んだディマ・スロボデニュークが登場。前半は名手シモン・トルプチェスキをソリストに迎え、ラフマニノフの《ピアノ協奏曲第2番》を、後半は、スロボデニュークが最も得意とするフィンランドの作曲家、シベリウスの《交響曲第2番》を詩情豊かに披露しました。

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18、シベリウス／交響曲 第2番 ニ長調 作品43

（左）指揮を務めたディマ・スロボデニューク
（右）ラフマニノフ《ピアノ協奏曲第2番》で独奏を務めたシモン・トルプチェスキ

（左）コンサートの前後にはN響メンバーも参加する「楽器体験工房」が開設された
（右）金管・打楽器の華々しいファンファーレで幕開け

公演報告

夏だ！ 祭りだ!! N響ほっとコンサート

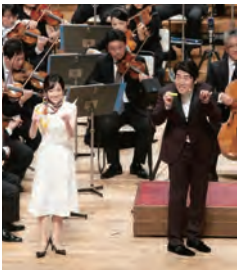
8月4日、NHKホール

NHKSO "HOTTO" CONCERT

夏休み恒例の「夏だ！祭りだ!! N響ほっとコンサート」、
今年は「世界ぐるっと名曲の旅」をテーマに掲げ、世界各地を題材にした作品を演奏しました。
N響初登場の気鋭の指揮者原田慶太楼のリードで行われた「みんなでマエストロ」のコーナーや
今もっとも勢いのあるピアニスト反田恭平が独奏で加わった《ラプソディー・イン・ブルー》など、
大きな盛り上がりのうちに、年一度の真夏の大イベントは終了しました。

ロッシーニ／歌劇「ウィリアム・テル」序曲から終曲「スイス軍隊の行進」、ブラームス／ハンガリー舞曲集から第5番、ドヴォルザーク／スラヴ舞曲集 第1集から第1番、ボロディン／歌劇「イーゴリ公」から「ダッタン人の踊り」、ガーシュウィン／ラプソディー・イン・ブルー、ビゼー／「アルルの女」組曲 第2番から「メヌエット」、エルガー／行進曲「威風堂々」第1番、ヒナステラ／バレエ組曲「エスタンシア」作品8から「マランボ」

（上）ヒナステラ《バレエ組曲「エスタンシア」》
（左下）指揮を執った原田慶太楼とナビゲーターを務めたNHKアナウンサーの林田理沙
（中下）ガーシュウィン《ラプソディー・イン・ブルー》でピアノ・ソロを務めた反田恭平
（右下）指揮者体験コーナー「みんなでマエストロ」の様子。今年はケミカルライトを使って会場全体で指揮に挑戦



ベートーヴェン《歌劇「フィデリオ」》。この公演のために名門オペラハウスで活躍する歌手たちが集った（8月29日）

公演報告

ベートーヴェン生誕250周年記念
パーヴォ・ヤルヴィ&N響 オペラ《フィデリオ》（演奏会形式）

8月29日、9月1日、Bunkamuraオーチャードホール

L.v. Beethoven: Opera "Fidelio" (concert style) by Paavo Järvi & NHKSO

パーヴォ・ヤルヴィとN響による演奏会形式での舞台作品上演の第3弾は、ベートーヴェンのオペラ《フィデリオ》。指揮者の十八番でもある作曲家唯一のオペラを、世界最高峰の歌手たちとともに熱演しました。

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ、ドン・ピツァロ：ウォルフガング・コッホ
フロレスタン：ミヒャエル・シャーデ、
レオノーレ：アドリアンヌ・ピエチョンカ
ロッコ：フランツ・ヨーゼフ・ゼーリヒ、
マルツェリーネ：モイツァ・エルトマン
ヤキーノ：鈴木 准、ドン・フェルナンド：大西宇宙
合唱：新国立劇場合唱団（合唱指揮：冨平恭平）

（上）指揮を務めた首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィ
（下）拍手に応える出演者陣。左から、ウォルフガング・コッホ、大西宇宙、鈴木准、冨平恭平、パーヴォ・ヤルヴィ、モイツァ・エルトマン、フランツ・ヨーゼフ・ゼーリヒ、アドリアンヌ・ピエチョンカ、ミヒャエル・シャーデ（いずれも8月29日）